

上にある頭像は、私たちと同じ目線の高さで、寅彦博士の表情を間近に見ることができております。

あわせて、市民・県民の学びの場である「オーテピア」に、寅彦博士の銅像が設置されることは、市民・県民をはじめとする利用者の皆様、そして子どもたちに、寅彦博士が「ねえ君、不思議だとおもいませんか。」と語りかけているようで、身近な現象から科学への興味につながる一助となるものと期待いたしております。

本年7月24日は、「オーテピア」が開館する日であるとともに、友の会や「寺田寅彦の銅像を建てる会」の皆様方にご尽力いただきました寅彦博士の銅像のお披露目の日ともなりますので、今から楽しみにしているところでございます。

最後になりましたが、友の会の皆様方には、これまでと変わらぬご協力を賜りますようお願いいたしますとともに、ご健勝・ご活躍と、今後のますますのご発展を祈念申し上げます。

平成30年4月22日

高知市教育長 横田 寿生

平成30年度寺田寅彦記念館友の会総会 記念講演要旨

「なぜ寺田寅彦を上演したのか」

講師 西森 良子（劇団 the 創代表）

「なぜ寺田寅彦を上演したのか」という演題は、「何を、どのようにして寺田寅彦のいろいろの部分を経験したか」ということに通じるとおもっています。

まず、「劇団 the 創のあゆみ」ですが、私達は、土佐で生きた人達のことを忘れてはならないということから、芝居にして発信をしている劇団です。



牧野富太郎から始まりまして、小砂丘忠義、岡上菊栄とか荒木初子とかそういう人たちにつながっていき、その流れの中で、寺田寅彦を上演することになったのです。だから、いきなり、寺田寅彦をとりあげたというわけではなくて、それにはいろんな人とのつながりとかそういう中で、寺田寅彦の上演が実現したのです。

私は、高知で一番継承しなければならない人は、牧野富太郎と寺田寅彦だと思っていま

す。特に牧野富太郎は大好きな人で、うちの劇団は、牧野富太郎を5回も上演しました。

芝居作りの原点ですが、先ずはその人物に関わる資料の読み込みです。寺田寅彦に関する本は、学術的なもの以外は殆ど読みました。その間が、一番ドキドキして嬉しく、どんな劇にしようとか、寺田寅彦にはこんなことがあるのかとかというワクワクしながら資料を読み込みます。それが1年間ぐらいかかります。そして、一つの芝居を創り上げるのに2年ぐらい必要です。それを溜め込んだ後、脚本にしていくのですが、その作業は、案外2か月ぐらいでできます。

そして、資料の読み込みが終わったら、次にとっても大事な事は、現地に行くことです。寺田寅彦のお墓へ一番に行きました。そして、九州に行く予定の時に、地震が起こったため、時期を置いて行きました。寅彦が勉強した五高の建物は地震の為に入れなかって残念でしたけれども、夫が、寺田寅彦が好きで、以前にたくさん取材をしてくれていましたので写真などはありました。そして、下宿先の柏木さんの所へ行き、門の中をのぞいていると向うから傘をさした上品な奥様が私の方を見ているので、あ、これは、このお家の奥様に違いないと思って、寺田寅彦を上演することを話したら、奥様がさっと昨年高知で講演をしていただいた先生を連れて来てくださっていろいろなお話を伺いました。ここで一場面ができたという思いですね。それから、立田山へ上がり、ここでバイオリンを弾いたのではないかという所を見つけました。そこからは街並みやお城が見えていたのですが、夫が言うのには、寺田寅彦がバイオリンを弾いていた時はお城が見えなかったのではないかと言っていました。次に、夏目漱石と寺田寅彦との関係は、すごく深いものがあったので、夏目漱石の住んだ家へ一軒一軒全部訪ねました。それと、東京ですね。彼が育った東京をどうしても見なくてはいけないということで、小さい時に通った学校へ行きました。生まれた場所というのは、東京がその頃とは変っているため、ここがそこだという確証を得られなかったけれど、このあたりだなという匂いを嗅いできました。辛かったことは、寺田寅彦はこの東京で3人の奥さんと暮らしているのですね。一番最初に夏子さんと暮らしただろうという土地がなかなか分からなくて、たくさんの人に聞き2時間ぐらい歩いてここかなという所を見つけました。そして、寛子さんと4人の子どもが暮らした弥生町のお家を捜しました。東大の裏の門をくぐったところにその家があって、その戸口の所で、寛子さんが買い物かごを下げて坂道を上がって行く姿をみたような気がしてつらかったですね。次に、寺田寅彦が建てたお家をやっと探し出し、昔の面影はないけれど、庭に子どもを乗せる自転車があり、時代の流れを感じました。そういう思いを現地調査の時にたくさん心に詰め込み、一場面一場面を構成していくのが私の役割です。それから、彼が結核で療養した須崎にも行きました。その砂浜に立つと、ここで種崎の夏子さんの事を思ったのだろうと想像したことでした。夏子さんが亡くなった種崎の家へも行きました。今はありませんが、海鳴りのザザーという音がする所で、夏子さんは死んでいったと思います。どうし

でも一場面にしたいと思ったのは、夏子さんが、生れたばかりの自分の子どもを見送った船で、死んだあと自分も送られて、寺田家へ帰って来たということを1シーンにして発信したいと思いました。須崎にある利正さんの先祖の墓にも行きました。それは偶然見つけたのですが、このように現地を歩き頭の中で構成していくという仕事をしながら舞台を組み立てていきました。

次は、劇を創っていく中でプロローグとエピローグをどうするのか、欠かせない土佐の風土をどう芝居の中に折り込んでいくのか、照明とか音楽とかを取り入れていくのか。どうしても入れたかったのは井口事件と関東大震災という歴史的事実の中で彼がどんな影響を受けたかという事です。

私達の劇団は、自分の意見をなんでも言い合える関係ができていますので、台本ができれば、まず皆で読み合わせをし、討論をします。でも意見をよく聴きますが最終的には演出が決めて行きます。

次に前に立ちふさがったのは著作権の問題です。親族の方々一人一人と交渉して了承をいただかなければならないのですが、関弥生さんのお子様に許可をいただくことによって早く進み、ポスター等も3か月前に間に合わすことができました。

私たちの劇団は、よく練習をします。特に1ヶ月前からは毎晩7時から10時までしています。そう言った中で、役者が一つの台詞を1000回ぐらい練習し自分のものにしていくのです。このようにして、劇ができていきます。

芝居というのは、研究発表の場ではなく日常生活の再現です。だから、寺田寅彦はこの場面にどういう言葉を言ったのか、奥さんに何を言ったのか、子どもがお父さんに何を言ったのかから始まるのです。そして、ドラマとは、創り事なのです。私達がやる劇がすべて事実とは限らないのです。人物を創りあげていく中で、例えば、劇の中にみよという女中さんがでてきますが、みよは架空の人物です。みよを中心として、夏子さんの時代とか寺田家のすべてを知っている女中さんということで創りました。そういった架空の人物を入れて時空を超えることもOKなのです。だからもちろん寺田寅彦がしゃべった言葉などは皆さんも私も分からないことで、こういうことを言っただろうと想定して創り上げて行きました。

創り上げていくポイントとして、どういう視点で劇を創っていくのかということはとても大事なことです。寺田寅彦の劇を楽しめるものにするだけではなく、寺田寅彦という人物を掘り下げて重要な部分を明確に発信していくことだと捉えています。寺田寅彦は科学者として絶対顕彰していかなくてはならないが、さまざまな実験の結果を表現するのではなく、根本的な寺田寅彦の心を表現したいと思って、たくさん文献を読みましたが、実は行き詰っていたのです。その時、「櫛」に出会ったのです。それをいただいて読んだときに、小宮さんが書いた科学者としての寺田寅彦の文章に出会い、これだと思えずごく感動

をしたので、この芝居の2幕7場の場面になっています。寺田寅彦はご承知のように、音楽がとても好きで、バイオリンが上手でピアノが弾けて、家で子どもさんと一緒に演奏会を開いたりしていました。そこへ小宮さんが訪ねてきて、夏目漱石先生の追悼会をしました。そういうことを前座に盛り込みながら科学ということをして寺田寅彦に言わせました。「この科学という力は、強力な光線を遠くまで放射して人を殺すこともできるものも持っている。でも、ぼくはそういうことをしない。自分のヒューマニズムが許さないし、科学の根底にあるのは愛だからね。科学によって人間を不幸にしてはならない。」ということが「榊」に書いてあったのです。そのことで私はすごく助かり、それを一場面にしました。また小宮さんの文章の中で後進を育てることも書いていました。それは、ラストシーンを見てもらえればと思いますが、寺田寅彦が科学に対してどういう気持ちを持っていたのか、そして、権威主義がとても嫌いで、夏目漱石もそうだったので寺田寅彦もそういう血を持っているのかと思います。それは、関東大震災の時に彼がどういう視点で見たのかということにも現れていると思います。芝居を創るのに時代の背景を抜きにしてはならないもので、その時代の中でどういう風に生きたかを検証することが私たちの役目なのです。寺田寅彦は後継者という問題で自分の業績を楯にして地位を築いていくことをとても嫌いました。後輩の研究を学術的に重要な雑誌に連名で載せるということが「榊」に書かれています。このことがとても嬉しくて、どの本にもこのことが載っていなかったので、「榊」は素晴らしい本だと思っています。皆さんの力で寺田寅彦の業績を伝えて行こうという愛がこの本を生んだと思って「榊」を大切にしております。そういった意味で、寺田寅彦の文をたくさん残していただいたから、大事な部分を創ることができました。寺田寅彦だけではないですが、こういう顕彰活動はすごく重要だと思っています。

それから、3人の妻のことは、絶対に芝居にしなければいけないということで、夏子さんの部分は多く取り一幕を全部夏子さんになりました。寛子さんについては、この脚本の元が3時間になってしまい、最終的には1時間カットしなければいけないということから2場面を1場面にしただけできませんでした。次に紳さんの果たした役割は絶対にとということでラストシーンに取り入れました。

そして、寺田寅彦の亡くなり方をどういう風にするかという場面には、ベッドの中で息を引きとったということはやめたいので、彼が音楽が好きだということで、モーツァルトのレコードを聴きながらタクトを振りながら亡くなるという場面を創り、皆さんには次の場面でああ寺田寅彦は死んだのかということが分かるように設定しました。

それから関東大震災で、この時にこれも「榊」に載っていたのですが、きちんと彼は見えていて、関東大震災が起きた時、死者が多くなった原因は、火災だということで、調査をたくさんしました。その中で、関東大震災を利用した人がいたことを、小宮さんがベルリンにいた所へ手紙を出していますが、例えば、「朝鮮人が、井戸に毒を入れた。だから朝鮮

人は殺さなければならないというような流言が広がって、罪もない人が沢山殺された。」そういうことを彼はきちんと見抜いています。彼は思想的な活動はしていなかったけど、そういうことはきちんと見抜いていました。

彼は、軍人の家庭で育ちました。利正という人は、歴史的な戦争に行ってどんどん位が上がり、恩給がたくさんついて財力ができ、高知では数少ない知名人でした。寅彦はすごく裕福な家庭で育ったのです。でも、彼は、お父さんが築いた財力を断ち切るのです。財産を伊野部の息子さんに託してお金を送らせるのですね。寺田寅彦は、大地主だったので、それを全部始末しています。それは、そういう権威主義が嫌いだったのか、軍人の報酬とかによって地位を築いて来たことに抵抗があったのかもしれませんが。でもお父さんの素晴らしいところは、たくさんのところに寄付をしていることです。学校に寄付をしたりしています。高知高ができる時に寺田寅彦は土地を知事と話し合っ安く売っているのですね。西南の役から始まって、戦争の中で生きてきたけれど、第二次世界大戦の前に死んだので、その戦争やその後の悲劇を知りません。もし、原発の問題で彼が生きていたらどう思うだろうかと強く感じるのですけれど、そういうものを見ずに死んだので、科学は人を救うという根底、寺田寅彦が発した思想そういうものを、そのあとに生きる私たちは、どうとらえていったら良いのか、私は脚本を作る中で、大きな課題だと思いました。

私は、芝居歴50年です。演劇なんてまったく縁がなかったのですが、中学3年の教科書無償闘争の時、南海中学校でよい先生に恵まれ劇団笛の会に連れて行ってもらいました。劇団笛の会に出会い、丸の内高校の1年生の時から笛の会に入って以来30年くらい活動をしていました。私の職種は保育士です。その中で、子どもと一緒に生活するのが、大好きで、今も68才ですが、現役で保育所の仕事をしています。子どものこれから生きるという力のエキスをもらって、これを芝居創りの原動力にしています。私たちは、12年前に皆で劇団 the 創という劇団を作りました。私は、役者一筋で生きてきたのですが、劇団 the 創から演出としての私の人生は始まったのだと強く思っています。どうしてかという、寺田寅彦も音楽とか、文学とかいうもので自分の自己を高めながら生きてきたのです。文化というのは、そういう力があるのです。私も10年間のあゆみの中で、文化というのは人と人とのつながりの中で育まれていくということをつくづく感じたのです。私が、寺田寅彦をやろうというのではなくて、劇団の歴史があるからなのです。(中略、この後、牧野富太郎、小砂丘忠義、荒木初子、上林暁の話をされました。)そして、どんどんつながっていて、たとえば、牧野富太郎と寺田寅彦はお互いに尊敬し合っていました。寺田寅彦記念館の入口の字は牧野富太郎が書いたものですが、牧野富太郎に尊敬している人は誰ですかと聞くと、寺田寅彦だと言ひ、寺田寅彦に聞くと牧野富太郎というのです。寺田寅彦はいつも出張とかにいく時に牧野富太郎の植物図鑑をポケットに忍ばせていたのです。寺田寅彦は牧野富太郎のレクチャーを東大の庭で聴いたのではないとか、植物採集にも

いったのではないだろうかと思像して、劇にもそういう場面を挿入したかったのですが、上演時間のためできませんでした。劇というものは、そういう人と人とのつながりの中で生まれていくということを是非皆さんにお話をしたかったというのがあります。

皆さんに、何故寺田寅彦を顕彰しているのかということを知りたいという事が突き上げてくるのです。皆さんの話を聞く中で、作品作りの原動力が出て来るのです。劇を創る中でつながっているものをみんなの力で創ってそれを発信していく、それが芝居作り演劇活動の一環なので、今日皆さんに話を聞いて貰ったのは、とてもうれしいことです。

最後に、劇の最後の場面を観ていただきますが、この場面は、弟子がどういう気持ちで、寺田寅彦を慕っていたか、そして紳さんの役割として寺田寅彦が造ったお家へ東一さんが帰って来るので明け渡さなければならない時に、紳さんが今日寺田寅彦の家から出て行くためにお別れする場面を設定し、そして、弟子の代表として「藤沢」と名付けた人が、寺田寅彦の葬式に来られなかったので、挨拶をしに来たという場面から最後の場面は始まっています。

(ラストシーン8分の場面を視聴)

今年は、高知で日本母親大会があります。夜のオプションで反戦詩人の榎村浩の上演をすることになっています。来年は、岡本弥太にたどり着き上演する計画です。

墓参の報告

総会終了後、寺田寅彦のお墓にお参りに行きました。

従来は、秋季研究会の後に実施していましたが、昨年、台風のため秋季研究会が中止となったため、今回実施しました。

お墓には、お花とともに、コーヒーとイチゴ、柏餅をお供えしました。

